



教育新報

第178号

新潟大学

現職同窓会員として

副会長を仰せつかり、昨年度3月、およそ三十年ぶりに教育学部F棟に足を踏み入れました。自身自身の学生時代の記憶が甦りました。この役につかなければ、このような懐かしいけれど新鮮な感覚を味わうことはできなかったと思います。この時、副会長を引き受けてよかった、そして、同窓会役員として会員の皆様に貢献できるような活動をしていかなければと改めて意を強くしました。

同窓会の目的は、会則第四条「本会は会員相互の親睦と資質向上を図り、母校の発展に寄与すること」とあります。そこで、現役会員とOB会員の皆様に、共に考えていただきたいことを、私見ではありますが、書かせていただきます。

OB会員の皆様は、教育学部卒業生の進路についてご存じでしょうか。下表のような状況になっています。私は、教職に就く進路選択者がもっと多いのだろうと予想していました。このデータをいただき、驚くとともに、せっかく育成した人材が流出してしまっていることに危機感を抱きました。学校現場は、人材確保に四苦八苦している実態があるからです。

教員以外の職業に就くことを否定しているのではありません。教員養成の学部に入學し学んできた多くの人材が他の職業についている実態は、私たちに何を投げかけているのでしょうか。学部もシンポジウムを行うなど教員養成改革を進めています。私たち現職同窓会員にできることは、教職の魅力を広く社会に発信していくことではないでしょうか。そして、本丸は、やはり働き方改革を推進していくことではないでしょうか。ブランク化している教職のイメージを払拭し、持続可能な教育活動の展開に向けて、私たちひとり一人の意識改革が、今、求められていると感じています。

	卒業年度			
	30	29	28	27
卒業生総数	359	370	377	362
教員正規採用	100	112	95	90
うち県内採用	62	71	56	55
講師採用数	25	34	35	41
大学院進学	29	37	34	39
教員以外	185	167	186	163
その他	20	20	27	29



教育学部同窓会副会長
瀬藤 雄二

花鳥風月

西門から、日本海と並んで一直線に見える教育学部棟。凜と構える総合教育棟。そして、第一食堂から流れってくるおいしそうな香り。

昨年度、教員免許更新講習のため、卒業してから十年ぶりに新潟大学教育学部での講義を受講した。お世話になった先生や同級生との再会は喜びであり、学生に戻って学ぶ感覚は新鮮そのものだった。

実際に今担任している子どもたちの顔を思い浮かべながら受ける講義は、大学時代にはない学びであり、教科の専門性を深めるにあたって有意義な時間となった。

さて、新学習指導要領完全実施を目前に控え、学校現場は大きく変わろうとしている。教職員の働き方についての議論も活発になり、今後の教育や学校自体の在り方についてはメディアでも大きく取り上げられている。

変革期を迎える学校教育。それに携わる一員として、大学での学びと学校現場をつなぐ役割を担うとともに、不易と流行、理論と実践を大切にして目の前の子どもたちのために力を尽くしたい。

(広報部 國井 恒太郎)

情報交換

情報発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ



新潟大学教育学部同窓会

第四十六回 同窓生の集い

研修部副部長 小泉 慎子

九月二十一日、アートホテル新潟において「不登校問題に取り組む教師の姿勢」引きこもりの原点を考える」と題して、元新潟市教育委員会学校支援課SSTチーフアドバイザーの石川志郎様よりご講演をいただきました。

一 記念講演会

○開会の挨拶

同窓会会長 臼杵 勇人

最近の大学の動向（来年度の教育学部入試の募集人員が四十人減となったこと、入試では必ず面接も課されることなど）についての説明の後、講師の石川志郎様のご紹介がありました。



臼杵 勇人 同窓会会長

「講師の石川先生は北海道苫小牧市ご出身で、昭和四十年卒業の同人です。生徒指導のオースリティーで、現在、聖籠町生徒指導アドバイザーと新潟教育会新潟研究所アドバイザーをなさっています。石川先生のお話は、県の喫緊の課題（いじめ・不登校・特別支援教育）の解決について、ご示唆くださることでしょう。」



石川 志郎 様

○記念講演

石川 志郎 様

不登校の子の傾向

- ① 強迫的傾向（良い子の息切れ型）
- ② 他者過敏性（他者が自分をどう思っているか）

③ 対人関係の乏しさ（自己防衛のため行けなくなる）

不登校の子の共通現象

① 日常生活の乱れ

② ゲームへの没頭

③ 対人回避傾向

不登校児童生徒は、他の子への共感性が育っていない傾向があり、それが課題でもある。

不登校の子への対応の原則

① 継続的な家庭訪問（強い励ましは無し）

② 傾聴・共感

③ 勉強場所は学校にこだわらない（フリースクール・家庭教師などでもよい）特性をもち、不登校に陥った子への対応

① 注意欠陥・多動性傾向のある子の場合
医療機関が有効の場合が多いが、皆の役に立っていることを褒めて自己有用感をもたせる。

② 自分から仲間に入れないなど自閉症傾向のある子の場合
自己決定にこだわり外部の強制は有効ではないので、例えば進路高校の選択もその子に任せるとよい方向に進む。

③ 学習障害が疑われる子の場合
読み書き計算・推論することの困難さを、小学校低学年の段階から見つけることが大事であり、そうすることで、中学校でも合理的配慮を受けられ、高校進学もスムーズにいく。

他にも、石川様より、子どものより

よい成長のためのお話を多くご教授いただき、大変充実した講演会でした。

二 懇親会

(一) 開会の挨拶 臼杵 勇人 会長

(二) 祝辞 柴田 透 学部長

(三) 宮園 衛 教育実践学研究科長

(四) 乾杯 八坂 剛史 副学部長

(五) 懇親会

・石川志郎様 ご挨拶

(六) 万歳三唱 藤井 保男 顧問

(七) 閉会の挨拶 渡邊 勝 副会長

教育学部同窓会は会員数六千五百名、六十四年にも及ぶ歴史のある会です。今年の懇親会参加者は八十名と盛況でした。来年もたくさんのご参加をお願い申し上げます。



会員の広場

平成から令和



新発田市立佐々木小学校
加藤 義孝

教職一年目の冬に平成元年となり、今年教職三十二年目を迎えた。私の教員生活は平成と共にある。卒業からほとんど大学に縁はなかったが、先だつて免許更新講習で久しぶりに大学を訪れる機会があった。

五十嵐に向かうにつれ、周囲の風景や街並みに学生当時の情景が重なって見えるような錯覚を感じた。

時間を忘れ、気の置けない仲間達と共に過ごした日々。教職を目指し、励まし合い、協力し合つて試験や論文に悪戦苦闘した日々などが懐かしく思い出された。大学時代の多くの学びが今の自分の基礎となつていることに改めて感謝している。

さて、令和元年となり、教職生活も残り数年。更新講習で、子ども達は、将来、未知なる試験に直面すると警鐘が鳴らされていた。久々の座学で痛めた腰をさすり、私自身も令和での自分の未知なる試験に向き合いながら、等身大で頑張つていきたいものである。

出会いを大切に



田上町立田上小学校
中山 理恵

新潟大学を卒業し、十年が経ちました。今年度、免許更新講習を受けるために、久しぶりに大学に行きました。西門から教育学部棟へ向かう道は変わらず、懐かしい気持ちになるとともに、当時の記憶が鮮明に思い出されました。サークルの仲間と、テニスをして汗を流したり、毎週のように集まって朝まで飲み明かししたりしたこと。学科の友人と、教員採用試験が近づくと、みんなで集まり、面接や実技の練習をし、励まし合つたこと。多くの友人に出会つたことで、毎日が充実していたことを改めて感じました。

友人たちとは今でも定期的に会います。会えば当時と変わらず盛り上がり、話は尽きません。環境が変わり、会う回数は減つても、変わらずにいてくれる友人たちとの出会いは、私にとつてかけがえのないものです。今後も一つ一つの出会いを大切にし、充実した毎日にしていきたいと思っています。

気付き



新潟市立下山小学校
長沢 優志

二〇一九年シーズンから野球を再開した。同じ職場の先生から、草野球チームに参加しないかと声を掛けていただいたことがきっかけである。久しぶりの野球を通して、気付いたことを紹介したい。

①体力は衰えるということ

走ると足がもつれ、ボールを投げると肩が痛む。「昔はこんなことなかったのに・・・」と思いつつも現実を受け入れるしかなく、定期的に運動することの大切さを痛感した。気持ちは若いつもりでいても、体の衰えは確実に進んでいる。

②スポーツの楽しさ

やはり体を動かすことは楽しい。チームスポーツとなるとなおさらである。プレッシャーに追われず、ただ体を動かすことの幸せを感じることができた。

大学を卒業して四年目。忙しく過ぎていく毎日である。そんな日々だからこそ、自分の体と向き合い、楽しみを見つけてながら過ごしていきたい。

私とイチロー選手



関川村立関川中学校
六井 啓一郎

忘れもしない三月二十一日、あのイチロー選手が引退会見を行った。私はテレビの前で涙をこらえきれなかった。小学校三年生の時、初めて両親に買ってもらった革のグラブも、バットも、すべてイチローモデル。自分の名前に「イチロー」が入っていることが誇らしかった。大リーグに挑戦してからも、あまたの大記録を達成し、大男達を相手に華麗にプレーする姿は少年時代の私をひどく魅了した。

イチロー選手の名言の一つに、「少しずつ前に進んでいるという感覚は、人間としてすごく大事。」という言葉がある。私はうまくいかないときに、今でもこの言葉を支えにしている。

引退会見では、流行語大賞の選考委員特別賞にも選ばれた「後悔などあるうはずがありません。」という言葉が生まれた。私もいつか教員を「引退」するときに、イチロー選手のように終えられるような教員人生を歩みたい。イチロー選手、今までありがとう。

学校紹介 ①

友達とつながり、地域とつながりながら、 学びをつなぐ児童を育てる

阿賀野市立安田小学校

当校は阿賀野市南東部に位置し、学区は東を五頭連山、南を阿賀野川に囲まれ、田園地帯が広がります。県酪農発祥の地として知られ、乳製品に加工して販売する会社が有名なほか、全国展開している製麺工場や、瓦づくり、焼き物の工房などもあり、風土・歴史に根付いた産業が多くあります。

平成二十九年度に保田小学校、赤坂小学校、山手小学校の三校が統合し、校名を「安田」小学校と改め、旧安田町の五小学校が一枚に統合された形となりました。

当校の学校教育目標は「学びをつなぎ 心ゆたかに生きる」です。「つなぐ・つながる」をキーワードに、多方面とつながり、学びを広げていきます。

一 児童同士のつながりのために

当校では、児童が好ましい人間関係を築くことができるように、ソーシャルスキル教育に取り組んでいます。ソーシャルスキルのテーマを毎月の生活目標として設定し、月初めには、全校ソーシャルスキル集会を行っています。

集会では、よいモデルや好ましくないモデルを職員が演じ、児童に考えさせます。

その後、学級で練習し、実際の生活場面で生きて働く力となるようにしています。

統合三年目になりますが、学校では、出身小学校による隔たりなく、学級・学年さらに異学年へと交流を深め、いろいろな友達と活動し合う児童の姿が多く見られます。



二 伝統をつなぐために

当校では、鼓笛隊演奏が、統合後も行われています。毎年、六年生が四、五年生に演奏の仕方を教え、引き継ぐ期間を設けています。

また、安田甚句も、伝統になりつつあります。もともと旧赤坂小学校で取り組まれていた安田甚句を、統合初年度の三年生が、途絶えさせてはいけないう、新しいメンバーでつないでいこうと挑戦し、翌年は、さらに太鼓や篠笛も取り入れて、引き続き、取り組みま

した。今年度は、その思いを引き継いだ現四年生が、演奏に取り組みました。練習には、地域の指導者のほか、演奏経験のある現五年生も指導に加わり、自分たちが経験したことを下の学年に教え、引き継いでいました。

三 地域とのつながりを求めて

総合的な学習の時間では、地域の店や工場などを訪ね、地域を知るとともに、携わる人との関わりを通して、仕事に対する思いや願いなど、生き方を学んでいます。

三年生は、食品を扱う店を訪ね、食を通して地域を学んでいます。五年生は瓦工場を、六年生は酪農家や焼き物作りの工房を訪ね、産業を通して地域を学んでいます。

学習を進める中で、児童は、地域の様子をくわしく知ることができ、たくさん魅力を発見しています。

友達とつながり、地域とつながり、児童は多くを学んでいます。学校も、

地域・保護者と今まで以上のつながりをつくっていきたいと考えています。
(文責 磯部博幸)



令和元年度 会務報告

令和元年

4・3 入学式・保護者懇談会
(朱鷺メッセ・学部)

4・18 平成30年度会計監査
(じよいあす新潟会館)

5・11 第一回本部会
(新潟教育会館)

【評議会に向けての議案審議、決定】
評議会(新潟教育会館)

【平成30年度会務報告・決算報告】

6・8 評議会(新潟教育会館)

【令和元年度活動の重点・専門部活動計画・役員及び予算案承認】

○学科代表者会・支部長会

教育新報「第177号」発行

カミングホーム・デイ
(ホテルサンルート新潟)

7・20 第46回同窓生の集い
(アートホテル新潟駅前)

○記念講演・演題「不登校問題に取り組む教師の姿勢」くひきこもりの原点

9・21

8・24

学校紹介
②

地域とともにある学校づくり
コミュニティ・スクールと地域連携

見附市立南中学校

見附市立南中学校は、見附市の南部に位置しています。学区は刈谷田川が東西に横断する水景豊かな地域です。今年度創立四十一周年を迎えた、全校生徒百九十九名の小規模校です。「自主・協和・練磨」の教育目標のもと「笑顔南中」をスローガンに掲げ、教育活動を展開しています。

一 南中学校の地域連携の特徴

見附市立小・中・特別支援学校は、コミュニティ・スクール（Ｃ・Ｓ）を推進しています。当校のＣ・Ｓの特徴は、大きく三つあります。

一つ目は「Ｃ・Ｓ総会」です。この総会は年二回開催され、学校、ＰＴＡ役員をはじめ、各地区の区長、地域コミュニティの代表、後援会、同窓会などおよそ七十名の方々が集まります。南中学校と地域が協働・共生するため何ができるかを話し合います。

二つ目は、そのＣ・Ｓ総会に代表生徒も参加することです。地域の方々の中で、堂々と意見を述べます。

三つめは、後援会、同窓会の他、「未来南杜の会」という学校支援団体から支援をいただいていることです。南杜の会は南中ＰＴＡのＯＢの有志で結成

され、独自に活動しています。また、Ｃ・Ｓ総会は、もともとＣ・Ｓの制度ができる前に南杜の会が立ち上げた総会です。学校の地域連携の中核であるこの総会を、今でも南杜の会が運営しています。

二 地域とともにつくる防災教育

平成十六年の新潟・福島豪雨で刈谷田川が氾濫し、見附市は甚大な被害を受けました。その経験を生かし、見附市は毎年六月の週休日に総合防災訓練を実施しています。この日は子どもからお年寄りまで、全ての市民が各地区の避難場所に向かいます。南中学校の生徒も避難するだけでなく、受付業務を行ったり、炊き出し訓練を行ったりして、地域の防災の中核として活躍します。また、防災訓練の事前事後には「災害時に自分たちができること」をテーマに学習を進めます。

三 花と緑のプロジェクト

前述の水害時には南中学校も校舎が床上浸水となりました。水害後、学校の復旧のために多くの地域の方々から奉仕活動をしていただきました。その

お礼として当時の南中生が学校脇の道路にプランターを設置して「フラワーロード」をつくりました。この取組が今も継続し、毎年五月には二年生を中心におよそ百メートルの区間を花で飾っています。また、見附市の「四つ葉運動」の一つである「花と緑」の取組として、各教室にグリーンカーテンをつくったり、地域の方々にコスモスの苗を配付したりして、校地緑化とともに地域との関わりを深めています。

南中学校は校務分掌に知・徳・体に加えて、地域のプロジェクトを設置しています。地域の方々が南中学校の生徒を大事に思い、学校に支援してくださるからこそ成り立つ分掌です。これからも、地域との絆を大事にして、ふるさとを愛し主体的に地域に貢献する生徒の育成に取り組めます。

（文責 教頭 恩田 康一）



10・19

を考える」
・講師 石川 志郎 氏
（聖籠町生徒指導アドバイザー）
○懇親会

全学同窓会交流会

（ANAクラウンプラザホテル新潟）
○記念講演

・演題「お口から考える健康長寿」
・講師 吉江 弘正 氏
（新潟大学名誉教授）

○特別企画

・演題「新潟の酒造り」
・講師 金桶 光起 氏
（新潟県醸造試験場長）

○懇親会

令和二年

1・23

教育学部教員・職員と同窓会との懇談会・懇親会
（じよいあす新潟会館）

教育新報「第178号」発行

第二回本部会（教育学部）

【令和元年度会務報告・各部活動反省・会計執行状況の報告】

【令和二年度の活動方針・予算案検討】

卒業式・祝賀会

（朱鷺メッセ・東映ホテル新潟）

2・29

2・20

3・23

全学同窓会交流会報告

広報部 島垣 武

令和元年度新潟大学・全学同窓会交流会が十月十九日（土）にANAクラウンプラザホテル新潟で開催された。今年度は、歯学部同窓会が計画、運営にあたり、「口と食からめさせ健康長寿」というテーマで、特別企画と記念講演が行われた。

開会の挨拶では、高橋姿学長から現在の大学の取組について、陸上競技部の全日本大学駅伝出場、「日本酒学」の開講などが紹介された。

特別企画では、新潟県醸造試験場長である金桶光起氏より、「新潟清酒の魅力」過去、現在、未来」と題し、新潟県の日本酒の特徴について講演していた。

新潟県は全県にわたって九十八もの蔵元があること、その背景に県の名水が多くあり水が良いこと、醸造用水は軟水が主流であるため、淡麗で上質な日本酒になることなどの話を

聴き、新潟県の日本酒の魅力を再認識する機会となった。また、

適量の酒は健康に良いことも紹介された。



新潟大学名誉教授
吉江 弘正氏

続いて、新潟大学名誉教授の吉江弘正氏より、「お口から考える健康長寿」と題し、「口腔と健康長寿」、「歯周病と全身の病気」、「歯周病・う蝕の予防法」の三点から講演をしていた。歯の数や歯周病と健康寿命には関連があり、歯周病は糖尿病や心筋梗塞、リウマチなど、全身の病気に影響を与えることに驚いた。歯周病・う蝕（むし歯）の予防法として挙げられた「ていねいな歯磨き」、「定期的な健診・歯科検診」、「適切な生活習慣」はすぐに実践したくなる内容であった。

懇親会では、臼杵勇人全学同窓会副会長の挨拶で始まり、来賓として下條文武前学長よりご祝辞をいただいた。日本酒での乾杯、県内四十の蔵元の日本酒がテーブルに並ぶなど、日本酒を堪能しながら懇親を深めた。

先輩の
声

「私には夢があります」

教育学部同窓会顧問 佐藤 重勝

「教育は国家百年の大計」という言葉があります。人材育成こそ国家の要であり、長期的視点で人を育てることの大切さを説いた言葉です。裏を返せば、教育の成果は、企業の経営のように短期間で求められるのではないということです。

しかし、二〇年ほど前に公立学校にも企業経営と同様に市場原理・競争原理が導入されたことがありました。当時、こうした教育改革について安彦忠彦氏は、次のように述べています。

「何よりも言っておきたいことは、現在は行政主導ではなく、政治家主導だと言うことである。つまり、中央の行政はこのような方向を求めているが、必ずしもこうなるという保障はないというのである。政治家の一言で、このような方向は捨てられる可能性がある、というのが現在の教育行政の実情である。」

このような状況は、何も教育に限らないことが「桜を見る会」で露呈されました。しかも、行政機関の中核を担う優秀な官僚が、多くの国民が首をかしげるような答弁を繰り返しています。理想に燃えて公務員となった人たちなのに、哀れささえ感じます。

ところで、テレビドラマ「同期のサ

クラ」が好評です。高畑充希の演じる主人公・北野桜は新潟県の架空の離島の出身で、大学を卒業し建設会社勤めです。しかし、自分の思いが強く、正しいと思ったことは不利益を被ろうともやり通す女性です。彼女は上司に向かって、毎週「私には夢があります」と決め台詞を言います。

その後に、「ふるさとに橋を架けることです。私には夢があります。一生信じ合える仲間を作ることです。私には夢があります。その仲間とたくさんの人を幸せにする建物を作ることです。」と続きます。「付度」とは無縁の彼女が、「付度」が蔓延している今の状況を見たらどう言うでしょうか。

教師も理想的な教育観をもって、子どもを育てることが求められています。若い教師の皆さんには、北野桜のようにキツパリと「私には教師としての夢があります。それは〇〇です。」と言えるように、日々の実践に取り組んでほしいと願っています。



学科紹介

世代を超えたつながり

保健体育科 六十三年度卒 保坂 章夫

二〇一九年、日本国中にラグビー旋風をもたらした、ラグビーワールドカップ日本代表の目覚ましい活躍がありました。チームは、日本を含む七つの国の出身者がいて、様々な言語や文化が集まる「多国籍チーム」でありました。しかし、その選手たちが強く結束し、これまでにない日本代表としてのチーム力を発揮し、ベスト8という輝かしい歴史を作りました。そして、その象徴として「ONE TEAM(ワンチーム)」が2019ユーキャン新語・流行語大賞に選ばれました。

私が保健体育科に所属していた約三十年前。まさに、保健体育科は他の学科に類を見ないワンチームであったと記憶しています。研究室の枠を越え、保健体育科に籍を置く先輩後輩全ての顔と名前の認識は当然のこととしてありました。また、体育会系特有の上下関係はあったものの、ほぼ全ての人と気さくにコミュニケーションを図ることのできる温かい関係性がありました。毎週水曜日の昼、全学生が講堂に集まり、情報交換と科の改善・深化について話し合いがもたれました。また、年間を通して、三十キロマラソンやバレーボール・ソフトボール大会などが催され、和気藹々とした雰囲気の中で、

保健体育科の学生としての親睦と士気を高めていきました。規律を重んじ、礼儀や思いやりの心を大切とする人格の形成は、まさに保健体育科で培われたものでありました。

保健体育科は毎年、「保健体育科卒業生の集い」を行っています。今年度は、新潟駅前のプラスサード店にて、現役の教官や学生を含め約六十名余りが集い、現状報告や学生時代の思い出に花を咲かしました。時を経て集う人たちは世代を超え、皆、アットホームな雰囲気



教育学部・教育実践学研究科との懇談会報告

交流部部長 永井 高志

一月二十三日(木)夕刻、新潟市中央区「じよいあす新潟会館」を会場に、「新潟大学教育学部並びに教育実践学研究科教員・職員と同窓会本部役員との懇談会・懇親会」が行われました。

毎年、同窓会交流部が企画・運営を行う事業で、今年度も多くの皆様からご参加いただき、相互の願いや今後の方向性を共有する、有意義な会合となりました。学部並びに教育実践学研究科からは、ご多用の中、柴田透学部長様・宮菌衛教育実践学研究科長様を始め、十名の教員・職員の皆様からご出席をいただきました。また、同窓会からは、臼杵勇人会長以下十四名が出席しました。

懇談会では、臼杵同窓会会長による開会の挨拶に続き、柴田学部長様並びに宮菌教育実践学研究科長様から、学部や教育実践学研究科の現状等についてお話しをしていただきました。

その後、同窓会の各専門部等(事務局・研修部・広報部・組織部・交流部・全学同窓会)から今年度の事業の概要について報告を行いました。

最後に、渡邊勝同窓会副会長から「母校の発展のために、ますます充実した活動に取り組んでいきたい」との挨拶で、懇談会を閉じました。

引き続き、同会場での懇親会は、臼杵会長の開会の挨拶、藤林紀枝副学部長様からの乾杯のご発声で開宴となりました。懇談会で出された教育学部並びに教育実践学研究科の現状やこれからの期待、カミングホームデイのさらなる充実等について語り合い、教育学部並びに教育実践学研究科と同窓会との懇親を大いに深めることができました。小久保美子教育実践学研究科副科長様から、学部並びに教育実践学研究科と同窓会のさらなる発展への思いを込めて、万歳をいただきました。最後に、関川紀美子同窓会副会長の挨拶で閉会となりました。

なお、本年度のカミングホームデイは、夏のお昼にランチバイキング形式で行われ、卒業生八名の参加を得ることができました。

年々、卒業生の参加人数が増えていることは嬉しい限りです。来年度も、多くの卒業生の参加を心より願っています。



大学の
コーナー

多様性を認め合う社会

新潟大学教育学部教授 有川 宏幸

「発達障害」のある児童生徒の存在を知らない教育関係者はいない。平成十九年四月に特別支援教育が学校教育法に位置づけられてから、既に十年以上が経過した。この間、通常学級に在籍する障害のある児童生徒の教育的ニーズが議論され、様々な教育実践が展開されるようになった。もちろん成果も上がっている。

しかし、一方で教育現場では、exclusionが進んでいやしないかと危惧する声もある。かく言う私も、そう感じている一人だ。

文部科学省が公表しているデータによると、全児童生徒数は減少しているにも関わらず、特別支援学校在籍児童生徒数は、この十年で約1.3倍（平成三十年五月一日現在143,379人）、特別支援学級在籍児童生徒数は約2.1倍（平成三十年五月一日現在256,671人）と増加の一途をたどっている。「発達障害」への理解が浸透し、児童生徒の教育的ニーズを把握する目が養われたからとの見解もある。しかし、障害は環境との相互作用から生じる。無理解がその要因になることもある。なのでその見解も、本当のところよくわからない。

ちなみに令和元年十月に公表された

小中学校における不登校児童生徒数は164,528人（前年度144,031人）と、こちらも年々増加している。この中には学校に身を置くことを苦痛に感じている児童生徒も多く含まれている。学校は居心地が悪くなっているのかもしれない。そうであるならば変わらなければならない。このままでは、いつの日か通常の学級に在籍する児童生徒はいなくなってしまうのではないか。そんな心配をしてみたりもする。

今、私たちは多様性のある社会でいろいろな人達と共に暮らしていることに気づき始めている。例えば、「性別」だ。LGBTが広く一般に知れ渡ったのは最近の話である。今はXジェンダーのように、これまで存在していると思い込んでいた「性別」という概念の存在すら怪しくなっている。生きにくさを抱えていた人達が声をあげたからだ。我々はこの変化のスピードにどう対応したら良いのか正直戸惑っている。存在を知ったが自分はどうすれば良いのか、それがわからない。「発達障害」が世の中に知れ渡る前、我々は同じ経験をしている。

文部科学省は、共生社会の形成に向けて、インクルーシブ教育システム

の理念の重要性を掲げている。しかし、インクルーシブ教育とは、障害のある児童生徒を障害のない児童生徒が包摂することではない。それはインテグレーション理念だ。そもそもが、障害の「ある」「なし」を議論しているうちは、共生社会の実現など夢の又夢である。人はもともと多様であり、同じではない。だからこそ「違い」があることを前提にしながら、試行錯誤の中で共生社会を作り上げていくしかない。理念を掲げれば作られるものではない。とは言っても、時間をかけ議論したから、わかり合えるものでもない。成果を求められる昨今の教育現場では、これではなおさら不安になる。だから、他の誰かに委ねたくもなるのだろう。でも、これでは本当に誰もいなくなる。今すぐにでも、出来ることが一つある。それは、互いの「存在」を認め合うことだ。とにかく「そこに居ていいんだよ」、互いにそう言い続けることだ。これならそれほど難しくはなからう。



事務局だより

永年会員の皆様へお願い

①平成22年以降に入学し、永年会員となられた方々は、各職場において会費を納入する必要はありません。しかし、二重に会費を納入している永年会員の方が多数見受けられます。その原因は、入会の手続きを保護者の方が行っていたこと、また会員証や「教育新報」等が自宅に届くなど他の学校会員とシステムが違い、ご自分が永年会員であること意識していないことが大きな理由です。そこで、「永年会員証」や保護者の方に確認するなどして、来年度からは確実な報告をお願いします。

②本年度八月に、「教育新報」などの発送作業を行いました。住所不明で返送されたものがありました。発送は、入学時に届けられた自宅への送付です。そこで、自宅住所が変わられた方は、メールもしくは電話（ファックス）等で同窓会事務局までご連絡ください。

FAX 025-263-6760